

## ミニシンポジウム「中学校地理教育を考える」総括

飯田 精一\*

### I. はじめに(主題設定の背景と各氏の発表から)

小学校、中学校及び高等学校の教員と大学の研究者とが集まり、「中学校地理教育を考える」と題してミニシンポジウムを開催したことは、大変有意義なことであった。

この主題設定の背景は、次の2点に集約できる。第一に、平成7年度から高等学校において、地理が「社会科」から「地理歴史科」に再編され、世界史は必修に、地理や日本史は選択制となったことに對し、これまで地理を熱心に教えてきた教員や地理教育研究者が重大な危機感を抱いていることである。第二には、小学校、中学校における教育課程の大きな変更が、高等学校や大学の地理教育で必要な基礎・基本に値するものになっているのかという不安である。

このような問題に対して、田丸氏(柏中学校)は、京都市との比較や人口を切り口として札幌市山鼻地区の特色をとらえる身近な地域の調査の学習の実践例を、村岡氏(豊園小学校)は、小学校における地図指導の重要性を示していただいた。また、伊藤氏(立命館慶祥中学校・高等学校)は、最先端技術(GIS)の教材を導入した中・高一貫校としての実践例を、山下氏(啓明中学校)は、生徒に意欲をもたせる絶対評価の実践例と教師の指導の実態とを示していただいた。各氏とも大変貴重な実践報告であった。

### II. 中学校・社会科地理的分野の学習(=地理学習)における変更点

主題設定の背景の一つとなっているのが、中学校・社会科地理的分野の学習(=地理学習)における変更である。次の3点に集約することができる。

- (1) 授業時数の大幅な削減 社会科(地理学習)は、週4時間から3時間へ、年間では135時間から105時間へ(1, 2学年は地理的分野, 歴史的分野の並行学習が原則)
- (2) 総合的な学習の時間の新設(年間70~130時間)、選択教科の拡大(全教科0~165時間)
- (3) 網羅的な指導から事例的な指導への変更 地域の規模に応じた調査では、「2つまたは3つの都道府県」、「2つまたは3つの国」を選択して指導することになった。

なお、札幌市の採択した教科書(東京書籍)では、次の三つの都府県(①多面的に調べよう・さまざまな地域からなる岩手県、②テーマ決めて調べよう・地域の中心的な役割を持つ福岡県、③比較や関連の視点から調べよう・世界と日本を結ぶ東京都)を取り上げている。したがって、学校所在地の都道府県として必ず取り扱わなければならない北海道の記述がないために、札幌市においては、三つの都府県のうち一つを削除し、北海道について新たに教材開発をする必要が生じている。また、次の三つの国(①多面的に調べよう・多様な地域から構成されるアメリカ、②テーマ決めて調べよう・多様な文化と変容するマレーシア、③比較や関連の視点から調べよう・地域との結びつきを強めるフランス)を取り上げている。

### III. 地理学習の実践に向けての課題

筆者は、地理的分野の学習において、「身近な地域」でのフィールドワーク(野外での観察や調査)の重要性を指摘する。なぜならば、フィールドワークを通して、生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めさせるとともに、校区を基にした市町村規模の地域的特色をとらえる視点や方法、

\*発表当時：札幌市立稲陵中学校，現在：札幌市立稲積中学校

地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせることができるからである。

地理学習は、地域的特色を明らかにすることを主たる目的としているので、生徒にとって直接的な経験地域としての「身近な地域」でのフィールドワークは、「なぜ、この地域にはこのような地理的事象がみられるのか」、「なぜ、この地域はこのような特色をもっているのか」という問いかけを基にして課題を発見する学習へとつながる重要な役割を担っているのである。

本校の社会科部会では、学校の周囲(約2.4km)を、ルートマップにしたがって実際に歩き、観察する「身近な地域」でのフィールドワークを実践した。実施に向けて大切にしたい視点は、次の3点である。

- (1) 「地域は、常に変化している」という視点。  
校区内に新たな店ができた、新しく信号機が設置されたことなどを生徒に気付かせるのである。
- (2) 「地形図を見て、実際に歩いてみないと地域の変化には気付かない」という視点。実際に歩いてはじめて、地形図から具体的な事象を読み取る作業が有効になり、逆に地形図には表現されていない具体的事象にも気付くことができるのである。
- (3) 「農家の方、消防署員の方など地域の人々とのかかわりを大切にしよう」という視点。  
地域を支えている人々の存在に気づき、その生き方を学ぶ大きな機会となる。そして、そのためには、十分な事前の活動(下見・打ち合わせ)や事後の活動(説明をしていただいた方々へ礼状を書くことや学習の成果を伝えること)が重要である。次年度以降も様々な方々から協力を得ることが可能になるからである。

また、本校では、社会科地理的分野の「身近な地域」でのフィールドワークで学んだ調べ方、学び方、まとめ方が、1学年の「総合的な学習の時間」(札幌市内での各事業所訪問)へと生かされるよう設定した。

さらに、フィールドワーク以外にも地図に親しむという視点から、地図帳を様々な場面で活用することが重要である。地図帳(札幌市は帝国書院

の地図帳を採択)は、本来、歴史的分野、公民的分野の学習でも活用すべき社会科の教科書であり、情報の宝石箱である。本校では、地図帳持込許可(15分間の時間制限あり)の定期テスト問題を作成するなどの実践を行っている。

#### IV. おわりに

「生徒の地理離れ、地図離れ」を指摘する前に、社会科教師の地図離れや地域離れを問題にするべきである。地理学習において、地図を全く使わないで授業をする教師や地図の基本三原則、①方位、②縮尺(スケール)、③地図記号を踏まえない教師がいることを残念に思う。

社会科教師そして地理を教える教師は、だれもが旅好きであろう。「実際にその現場に行って自分の目で本物を見てみたい、そして何かを体験してみたい」と思うからであろう。まさしく、フィールドワークこそ旅の原点であるはずである。

しかし、学習指導要領や教科書でも取り扱うようになっているものの、札幌市内の中学校100校のうち、フィールドワークを実施しているのは、5校程度である。「計画する時間がない」、「総合的な学習の時間に実施しているから」など言い訳はできるであろうが、重大な理由は、中学生時代以降にフィールドワークを体験した社会科教師が極めて少ないことにある。

「教師が変われば、生徒が変わる」であるが、この言葉は、「夢中になってフィールドワークを実施する社会科教師がふえれば、生徒は地理が好きになる」に言い換えることができるはずである。そして、そのことが、「地理が好き、社会科が好き、札幌が好き、北海道が好き、日本が好き」という生徒を育てることにつながると確信している。以上をもって、「中学校地理教育を考える」際のとめとしたい。

#### 参考文献

- ・文部省(1999):『中学校学習指導要領解説-社会編-』
- ・札幌市立稲陵中学校社会科(2003):『身近なフィールドワーク』